諮問時には R6. 8 月時点の人口データを記載しますが，令和５年度末現在に把握している資料を記載。

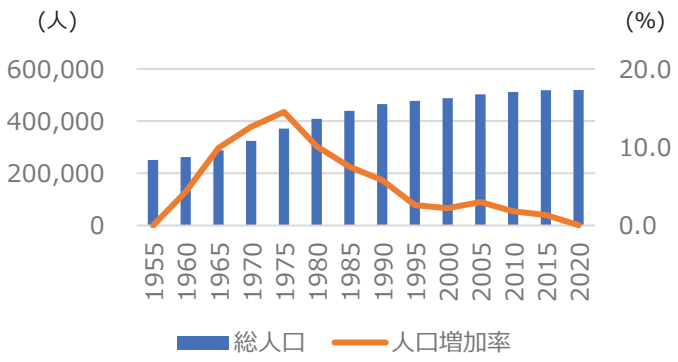
２．社会的環境

（１）人口等の推移

本市の人口は，過去 50 年間にわたり増加し続けており，2020（令和2）年現在 51 万 8,000 人で，北関東最大の人口規模を誇っている。ただし近年，人口増加率は鈍化傾向が続き，2015（平成 27）-2020（令和2）年の増加率は，1985（昭和 60）年以降で最も低い 0.3％とほぼ横ばいとなっている。全国の中核市と比べると，62 市のうち，本市の人口は6位と上位にある。人口増加率も 16 位である。

人口増加と同様に世帯数も増加し続けているが，一世帯あたり人員は減少し続けており，「単独世帯」は 35 年間で約 3.3 倍に増加，「夫婦のみの世帯」は 35 年間で約 5.1 倍に増加した。

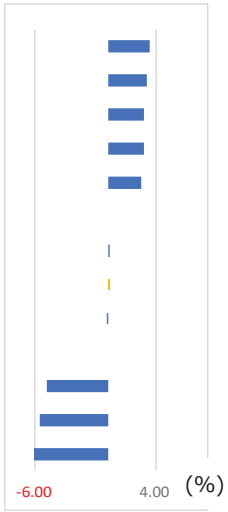
■宇都宮市の総人口と人口増減率の推移



■中核市48市の人口増減率（2015(平成27)-2020(令和２)年）

1位	明石市	3.47
2位	船橋市	3.21
3位	柏市	3.02
4位	吹田市	2.96
5位	川口市	2.80
15位	宮崎市	0.05
16位	宇都宮市	0.03
17位	水戸市	-0.04
60位	下関市	-5.01
61位	函館市	-5.60
62位	呉市	-6.11

（%）

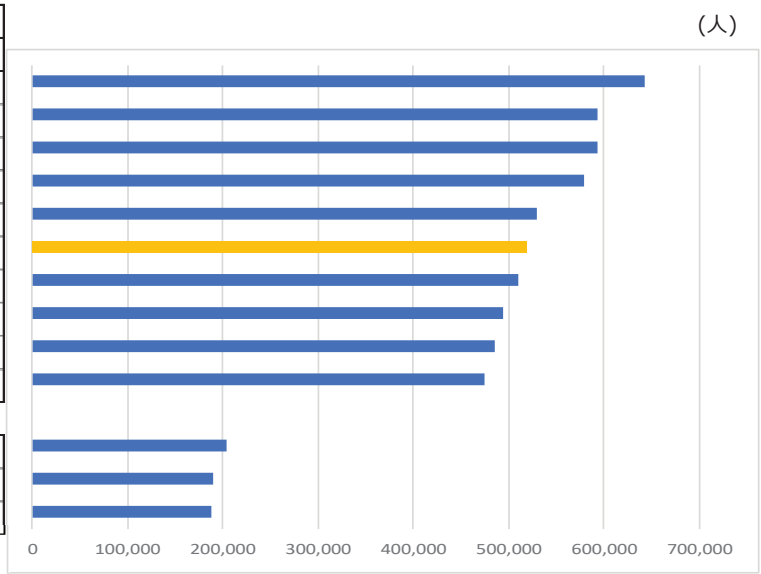


【出典】国勢調査

■中核市 48 市の人口（2020（令和２）年）

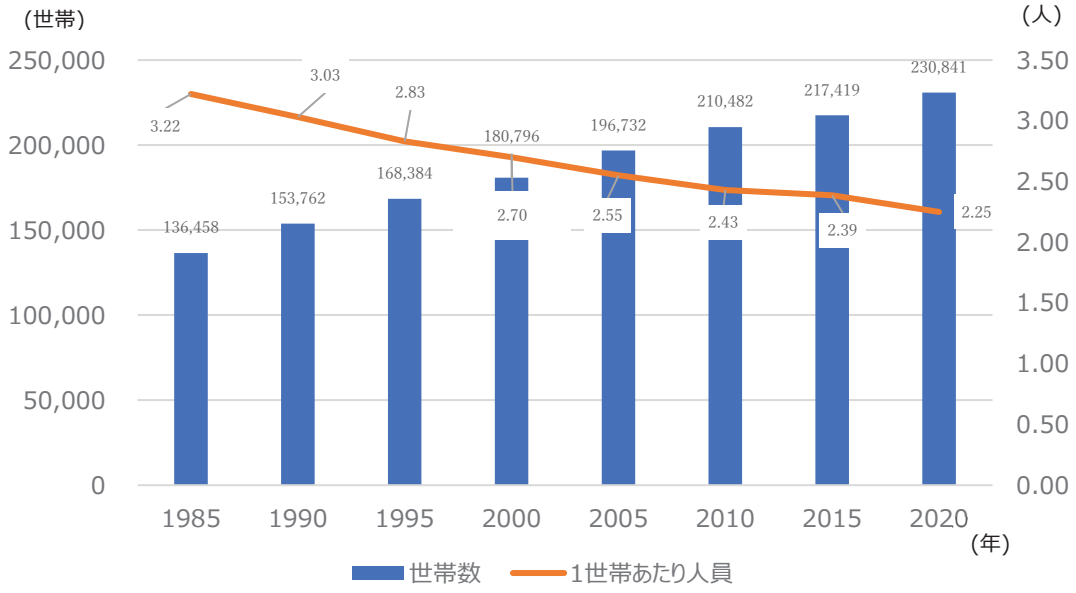
		2020 人口
1位	船橋市	642,907
2位	川口市	594,274
3位	鹿児島市	593,128
4位	八王子市	579,355
5位	姫路市	530,495
6位	宇都宮市	518,757
7位	松山市	511,192
8位	東大阪市	493,940
9位	西宮市	485,587
10位	大分市	475,614
60位	松江市	203,616
61位	甲府市	189,591
62位	鳥取市	188,465

（人）



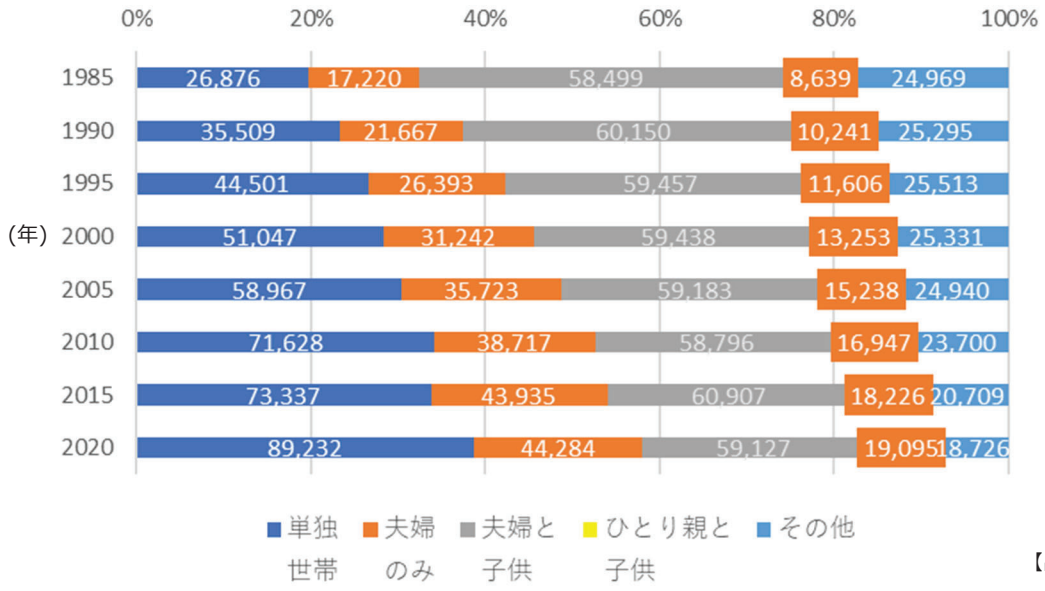
【出典】国勢調査

■世帯数の推移



【出典】国勢調査

■一般世帯の家族類型の割合の推移

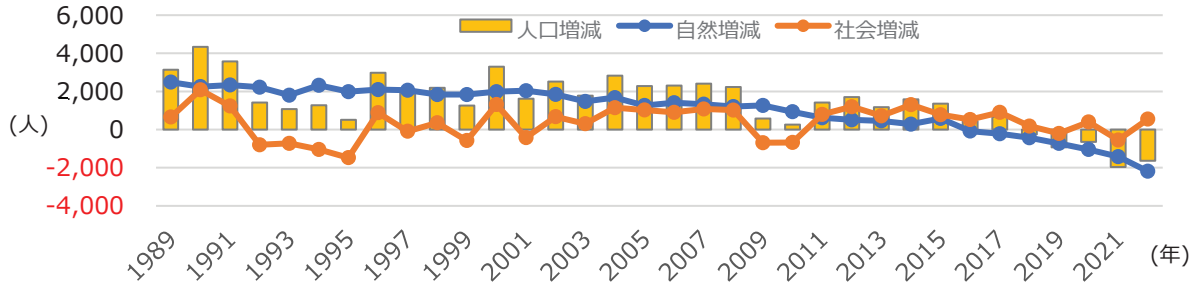


【出典】国勢調査

人口動態は，2016(平成 28)年まで毎年増加で推移している。ただし自然動態は減少傾向で，2016(平成 28)年に初めて死亡数が出生数を上回った。今後は，年少人口，生産年齢人口が減少し，老齢人口が増加すると推測される。

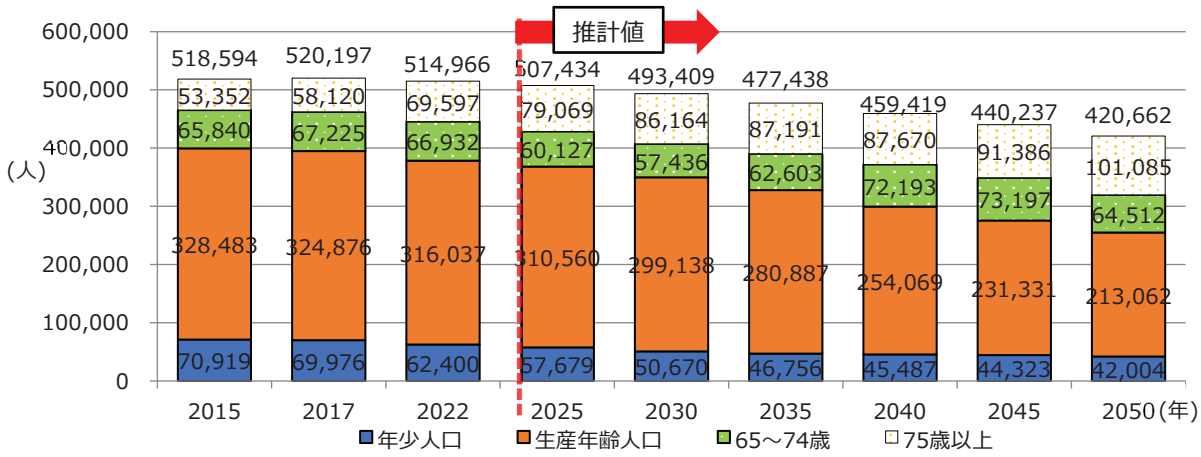
将来人口として，本市の人口は，2021(令和3)年には，51 万 7,000 人であったが，2050 年には 42 万人程度まで減少すると推計されている。

■宇都宮市の人口動態



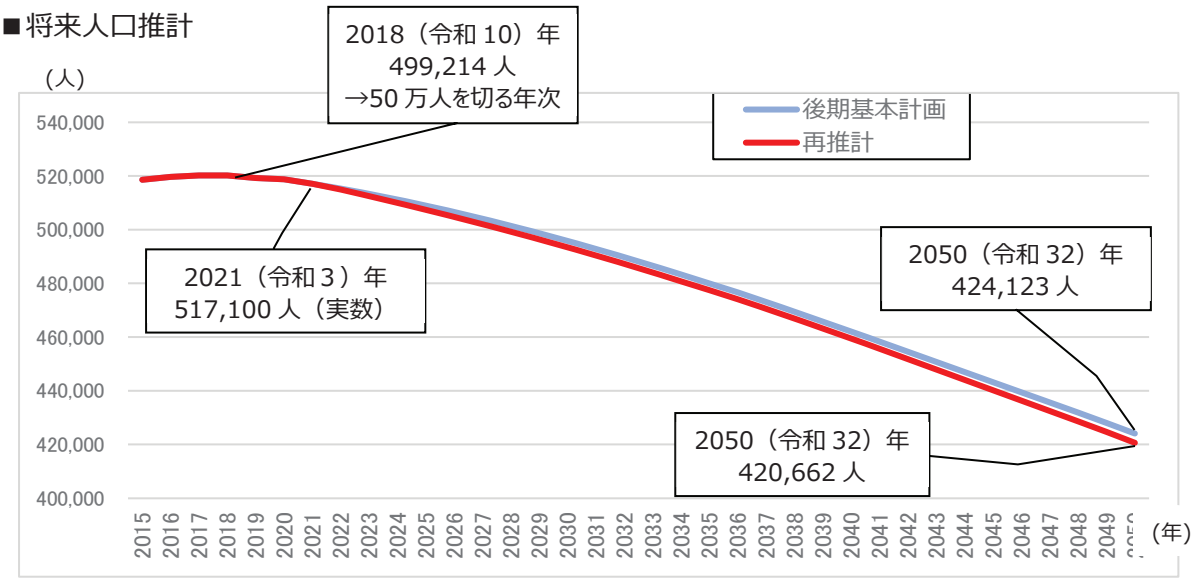
【出典】宇都宮市政策審議室

■年齢３区分別人口の推移



【出典】宇都宮市政策審議室 2023(令和５)年７月推計

■将来人口推計

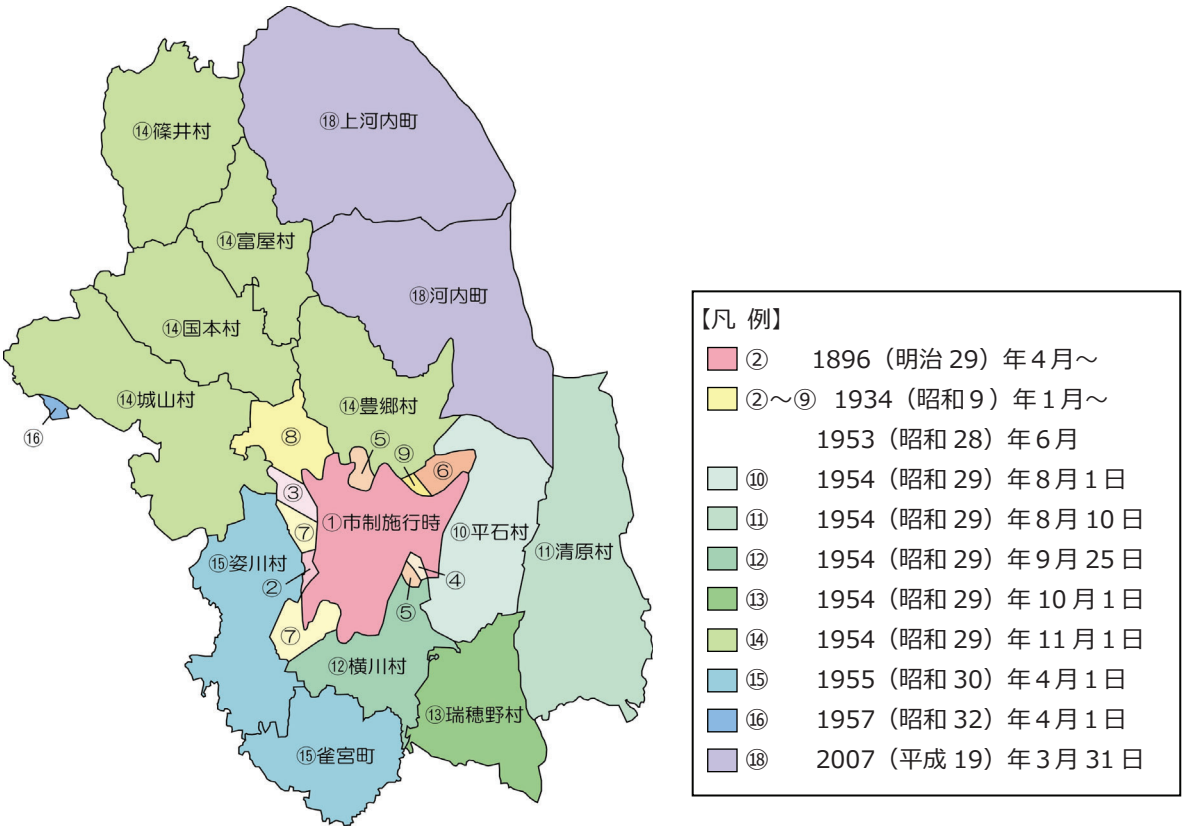


【出典】宇都宮市政策審議室 2023（令和５）年７月推計

（2） 市域の変遷

本市は，1954（昭和 29）年から 1955（昭和 30）年にかけて，隣接1町 10 か村を合併編入し，基礎を築いた。さらに 2007（平成 19）年には，上河内町及び河内町と合併し，50 万人都市となった。

■市域の変遷



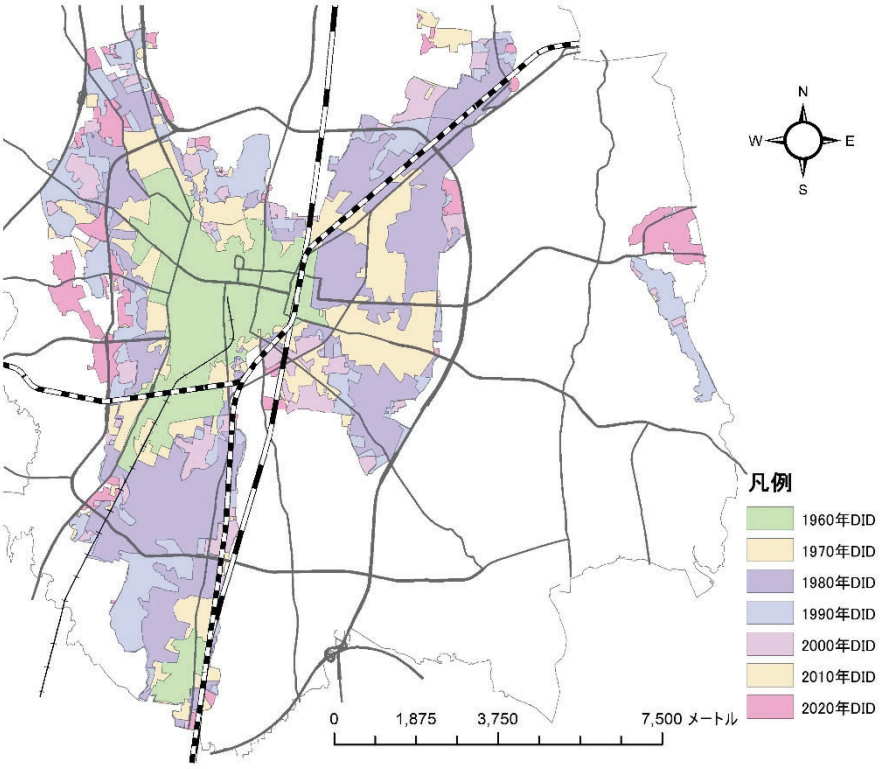
【出典】宇都宮市政策審議室

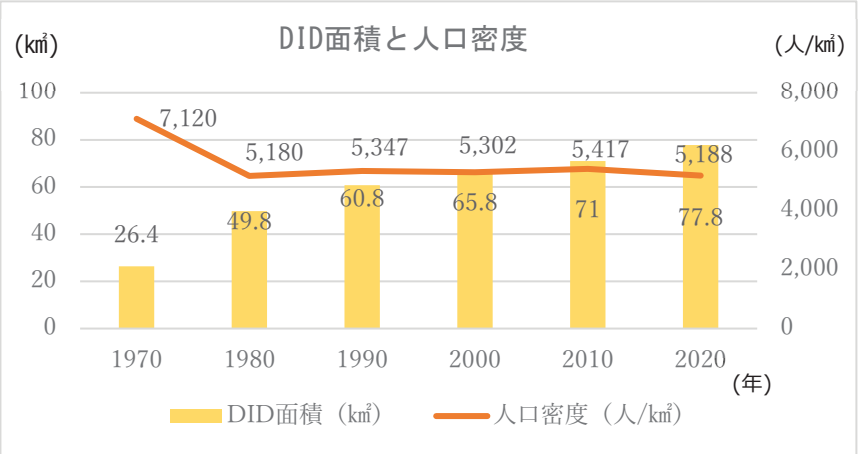
（3） 市街地の密集度の推移

1980（昭和 55）年ころから DID（人口集中地区）が拡大し，中心部と郊外部における密度のメリハリが少なくなり，市街地の低密度化が進んできている。このため，今後は，市街地の無秩序な拡大を抑制し，土地利用の適正化と拠点化を促進することにより，これからの人口規模に見合った「ネットワーク型コンパクトシティ」を目指すとし，拠点ごとの特性を活かしたまちづくりが進められている。

歴史文化の観点からみると，古くから人口が集中していた地区には都市文化が強く残り，近年市街地となってきた部分には農村文化が残るなど，地区ごとに個性ある歴史文化がみられる。

■ＤＩＤの変遷（1960（昭和 35）年～2020（令和 2）年）





【出典】ネットワーク型コンパクトシティ形成ビジョン

（4）目指すまちづくり

①スーパースマートシティ

「スーパースマートシティ」は，100年先も発展し続ける町の姿「NCC（ネットワーク型コンパクトシティ）」を土台に「地域共生社会」，「地域経済循環社会」，「脱炭素社会」の3つの社会が，「人」づくりの取組や「デジタル」技術の活用によって発展する「夢や希望がかなうまち」です。

■スーパースマートシティのイメージ

【出典】第６次宇都宮市総合計画後期基本計画

②ＮＣＣ（ネットワーク型コンパクトシティ）

「社会」･「環境」･「経済」は都市が持続可能な発展をするために必要となる3要素であり，本市はスーパースマートシティをこの3要素がバランスよく発展したまちとして掲げている。NCCは，そのスーパースマートシティを支える「まちの土台」となるものである。

NCCの形成に当たっては，地域特性を踏まえた各種の都市機能が集積した拠点を形成する「拠点化の促進」と，階層性を持った総合的な交通ネットワークによって拠点間の連携･補完を進める「ネットワーク化の促進」，市民の多様な暮らし方やライフスタイルを尊重した「土地利用の適正化」を一体的に進めることにより，コンパクトなエリアで日常生活に必要な機能が充足し，市民生活の質や，都市としての価値･活力を高めることのできる都市の実現を目指す。

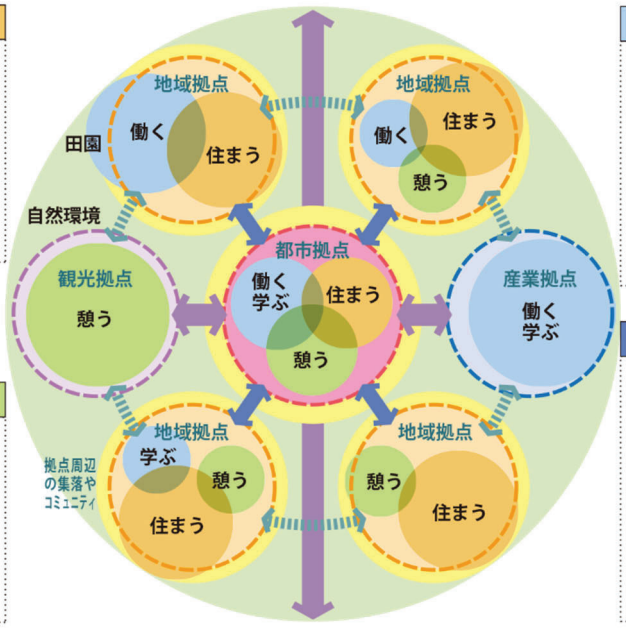
■NCC の概念図

住まう

今後の人口減少局面においては，市民の居住や日常生活を支える都市機能を拠点とその周辺に集約した都市の形成が必要であり，その形成に当たっては，中心市街地だけではなく，本市の成り立ちを踏まえた地域拠点への集約や既存コミュニティの維持・強化などが求められます。

憩う

市民の生活の質の向上を図るため，充実した余暇を過ごすことのできる環境や憩いの場を確保していくことが重要です。また，市民だけでなく，外部からの来訪者に対しても質の高い憩いを提供できるよう，都市のブランド力を高めていくことが必要です。



働く・学ぶ

本市経済の持続的成長を促すため，市民の働く場として，高い生産性や付加価値，競争力などを生み出すことのできる産業や事業所が集積する拠点の形成や本市の強みである農業の維持・強化，さらには，様々なまちづくりの原動力となる，こころ豊かで魅力あふれる「人づくり」を進めるための環境整備が必要です。

交通

超高齢社会の進行や地球環境問題に対応した都市を形成するため，過度に自動車に依存せず誰もが自由に移動できるまちづくりが重要であり，公共交通ネットワークの強化を図るとともに，交通の結節機能や利用環境を充実させることが必要です。また，活発な産業活動や来訪者の増加を促進するためには，円滑な道路ネットワークを構築することが必要です。

【出典】第６次宇都宮市総合計画後期基本計画

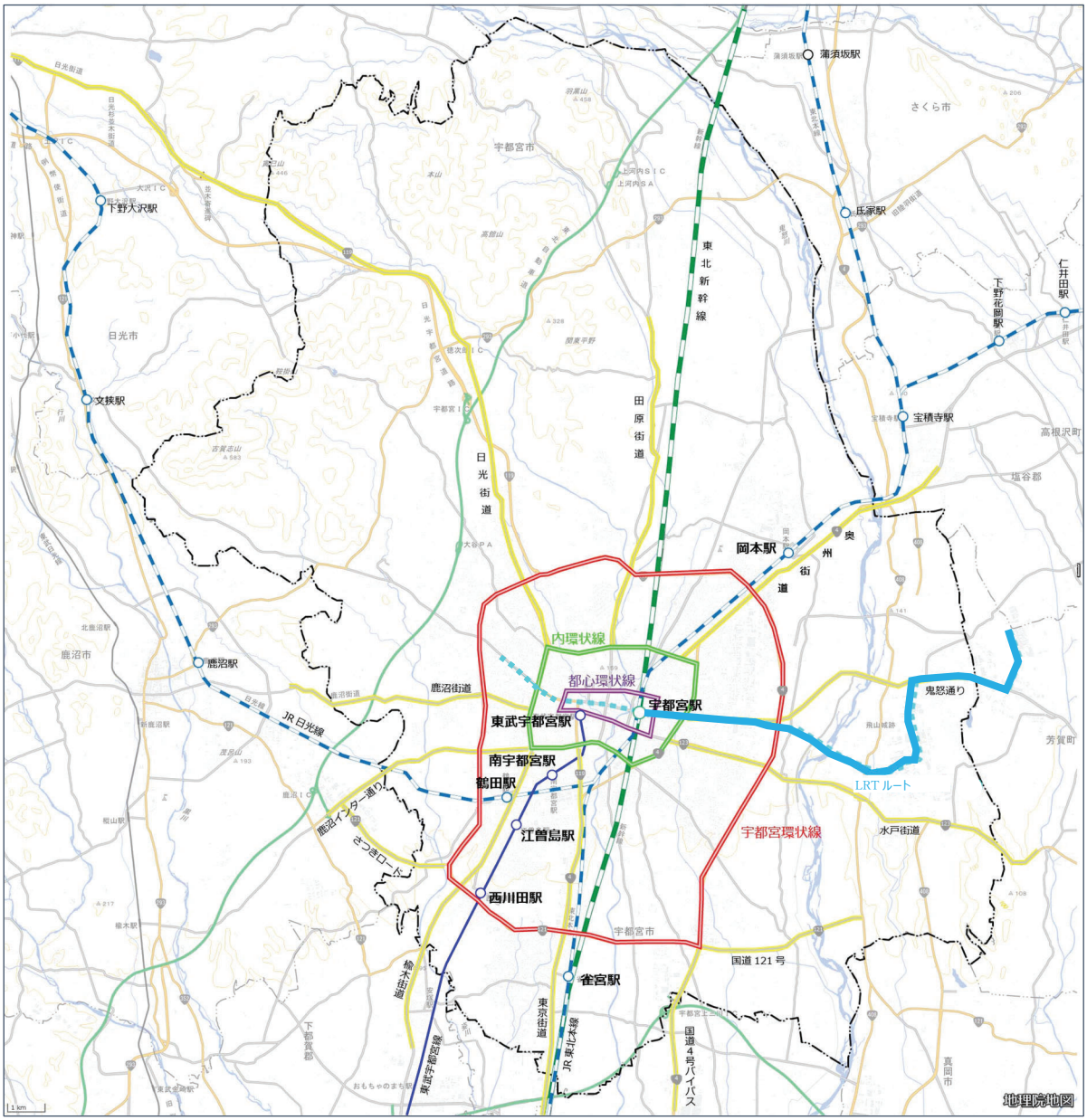
（5）交通機関

鉄道は南北方向に JR 宇都宮線と東北新幹線，東武宇都宮線が延びており，バス路線は JR 宇都宮駅を中心に放射状に延びている。

主要道路は，都心部を囲む「都心環状線」，「内環状線」，「宇都宮環状線」の3つの環状道路と，都心部から郊外に延びる 12 の放射道路で形成されている。

また，東西方向の基軸となる基幹公共交通として，ライトラインが 2023（令和5）年8月に芳賀・宇都宮間で開業した。

■交通網



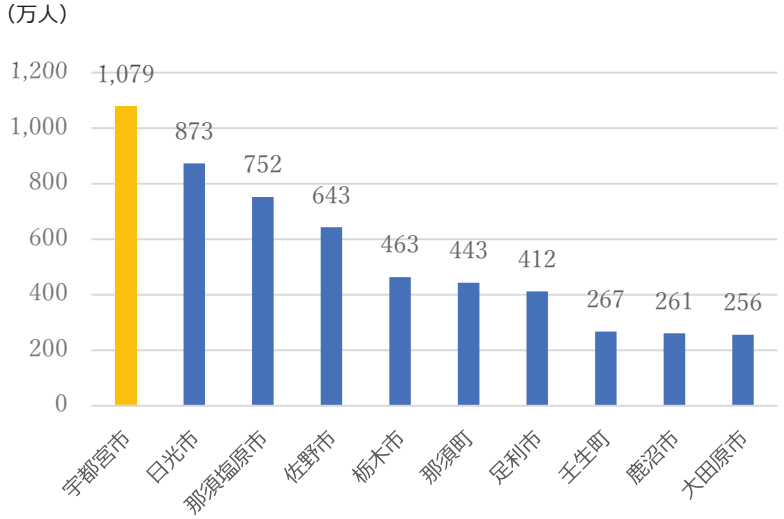
【参考】芳賀・宇都宮東部地域公共交通網形成計画（2015（平成 27）年 11 月）を参考に作成

（6）観光入込客数・宿泊者数

本市への観光入込客数は2022(令和4)年現在1,078万人で，世界遺産の日光東照宮などを擁する日光市を抜いて県内トップとなっている。ただし宿泊者数では県内2位であり，来訪者の属性として日帰りが多いといえる。

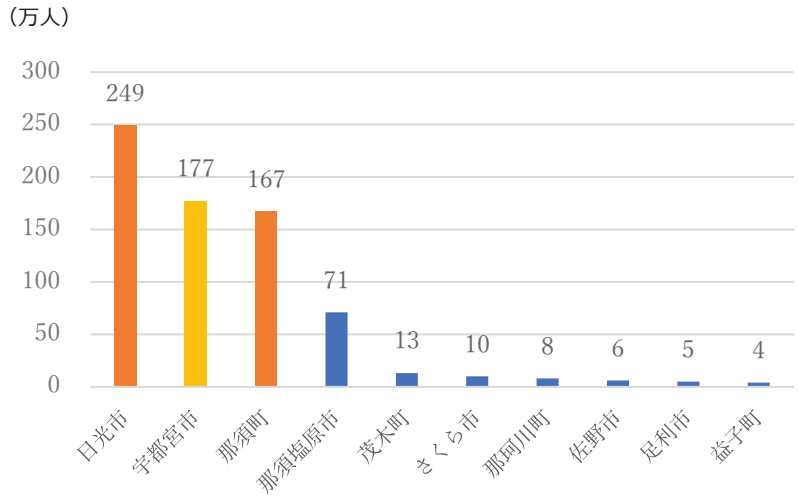
本市への来訪目的は餃子が多く，餃子は本市のイメージを形成する大きな観光資源である。次に飲食やまちなか散策に関わるものがあげられ，中心エリアの商業的な賑わいが本市の魅力のひとつとなっている。また近年，日本遺産「地下迷宮の秘密を探る旅　大谷石文化が息づくまち宇都宮」が認定された大谷地域への入込客数が増えてきている。

■栃木県内の市町村別観光入込客数（2022（令和４）年）



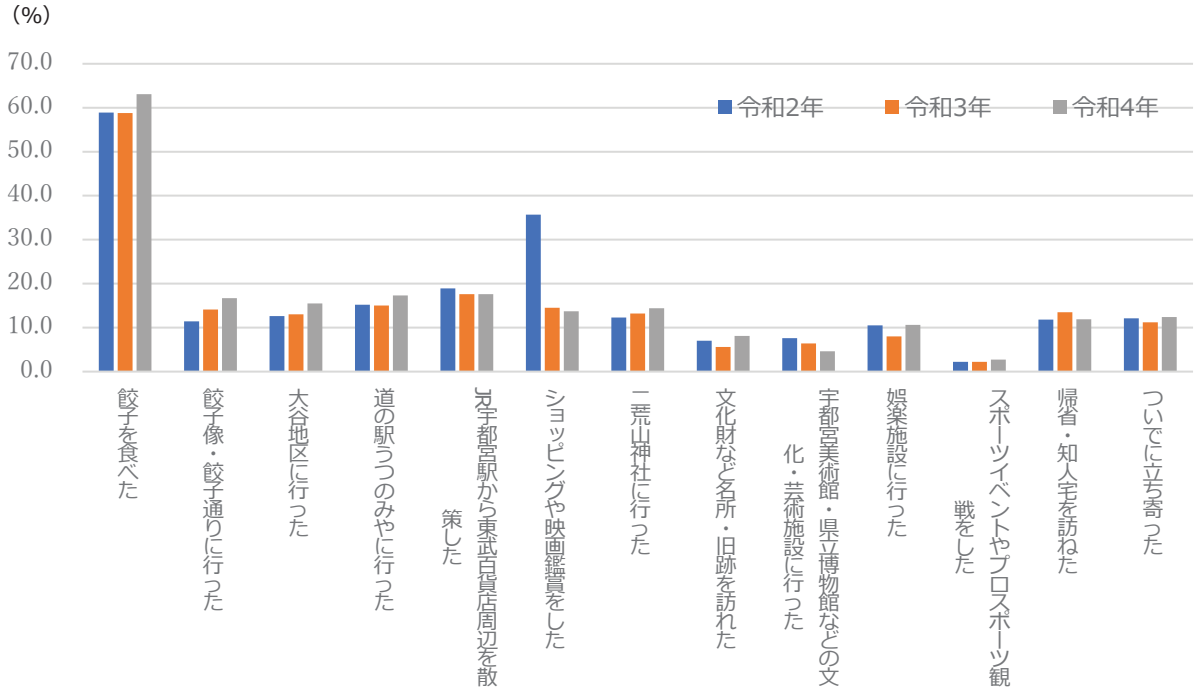
【出典】栃木県観光客入込数･宿泊数　推定調査結果（2022（令和４）年，栃木県産業労働観光部観光交流課）

■栃木県内の市町村別宿泊者数（2022（令和４）年）



【出典】栃木県観光客入込数･宿泊数　推定調査結果（2022（令和４）年，栃木県産業労働観光部観光交流課）

■本市への来訪目的



【出典】宇都宮市観光動態調査（宇都宮市経済部観光交流課）

（7）産業構造

本市の産業構造は，第一次産業から第三次産業までバランスよく構成されており，農村部では豊かな自然環境の中で，米･野菜･花き･果樹･畜産など，多様な農業が展開され，市内東部では清原工業団地などを中心に，高度技術産業の工場や研究所が集積するなど，工業都市としての一面をもつ。また，本市の商圏は 18 市町に及び，商圏人口は本市人口の 2.2 倍にのぼるなど，北関東の中核的な商業都市でもある。

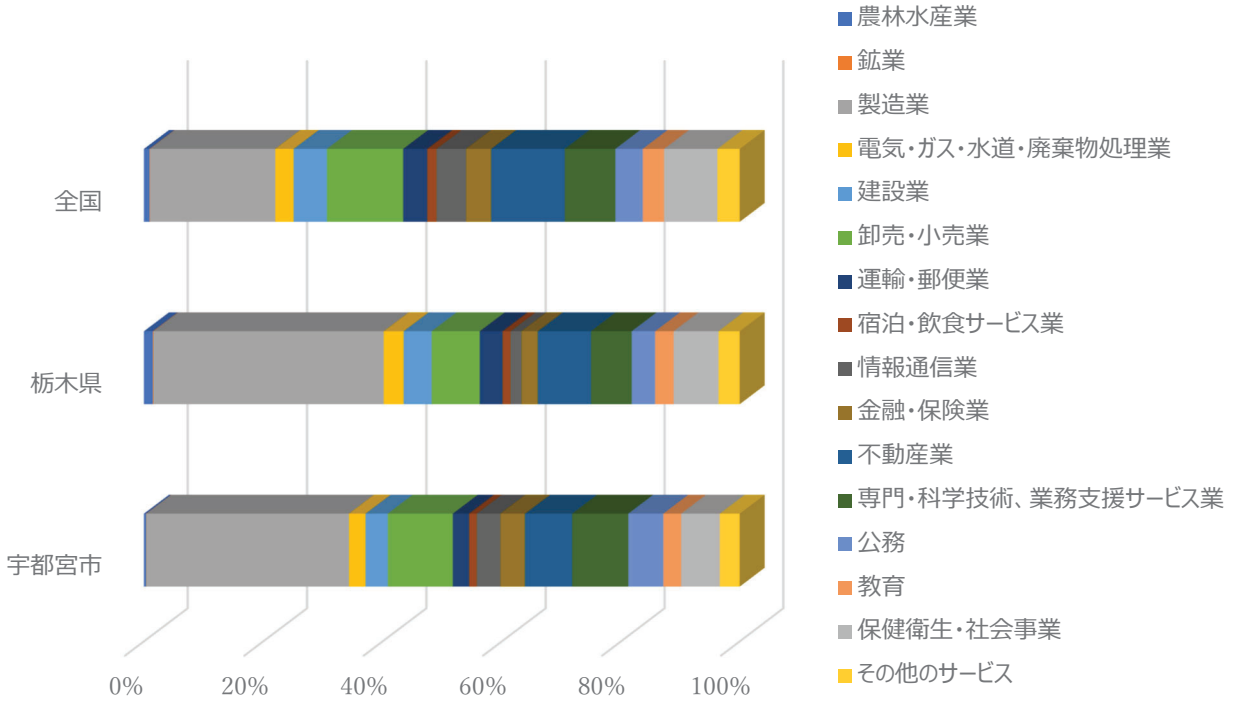
伝統工芸には，大谷石細工，ふくべ細工，黄鮒，宮染めなどがある。

■宇都宮市で生産されている主な農畜産作物（2020（令和２）年）

農畜産物	栽培面積(ha)	生産量(t)	生産額(百万円)
米	5,622	31,719	4,049
いちご	33	3,130	3,565
トマト	42	3,647	977
梨	176	1,833	870

【出典】2020（令和２）年栃木農林水産統計年報

■市内総生産額の産業別構成（2020（令和２）年度）



【出典】とちぎの市町村民経済計算（栃木県統計課），県民総生産（内閣府）

■宇都宮市の伝統工芸

大谷石細工

大谷石は細工が容易なことから、建材ばかりでなく、灯籠、置物としても利用されている。原石より型取り、原型の削り、細分の削り、仕上げの削りをして出来あがる。自然の石の素顔を大切にした温もりを感じさせる。

和太鼓

和太鼓は、お祭には欠かせない鳴り物。材料の欅を半年程乾燥させ、原木に合わせ太鼓の大きさを決める。芯を抜き、内側外側と仕上げて、2～8年程自然乾燥させた後、皮を張り、鋲を打ち、最後に塗装を行い完成。

黄鮒

黄鮒は宇都宮市を代表する郷土玩具。その昔、病気が大流行したときに、ある人が田川で釣った黄色い鮒を食べたところ、たちどころに病が治り、その後、病気にならなかったといういわれがある。

野洲てんまり

かつては、女の子の身近な道具であると同時に正月やひな祭りなどを飾る最高の宝物だった。木の実・くず繭などを芯とし、けば・ぜんまい・わた等を巻き、和紙で包み、手で握りこむように糸を巻き、模様を刺して仕上げる。

挽物

欅などを材料とし、ロクロを使って作る木工品。堅牢にして美しく、木目と漆の色の変化が楽しめる。製材した材料を1～2年乾燥させ荒挽きし、更に1年程室内で乾燥させてから、漆塗り、拭き仕上げを5～6回繰り返し完成。

宮染め

江戸時代、真岡地方で生産された木綿地を染めるため、田川沿いに染色職人が移り住んだという。精錬された生地にのりやロウで形付け、藍などの染料で一枚一枚丁寧に仕上げる。ゆかた・印はんてん・手拭・のれんなど。

ふくべ細工

大正初期から始まったと言われ、干瓢の原料である夕顔の外皮を乾燥させ、水洗いし、形を決め、内部を掻き出し、絵付けや塗りを施し、最後にカシューで艶を出して仕上げる。瓢盆・炭入れ・ふくべ雛などになる。

曲物

欅や杉の薄板を材料に作られた木目の美しさを活かした華器・茶道用器など。用途に応じた寸法に材料を加工し、お湯に入れ材料をやわらかくしてから曲げ、形を整え固定、その後、乾燥させ、漆を塗り、磨き仕上げる。

弓具

全工程の大部分が手作業であり、四本で一組の矢は限りなく同一に近い完成度が要求される。鷲・鷹等、斑の文様の美しい鳥類の羽を使用する美的特性も重要な要素。

琴

1～2年桐材を乾燥させてから甲良木取り、荒削り、内部をすいて、綾杉の彫りを入れる。裏板を張り、焼ゴテで胴の表面を焼き、磨きをかけて装飾品を付け、最後に糸を張って完成。全工程が手作業。

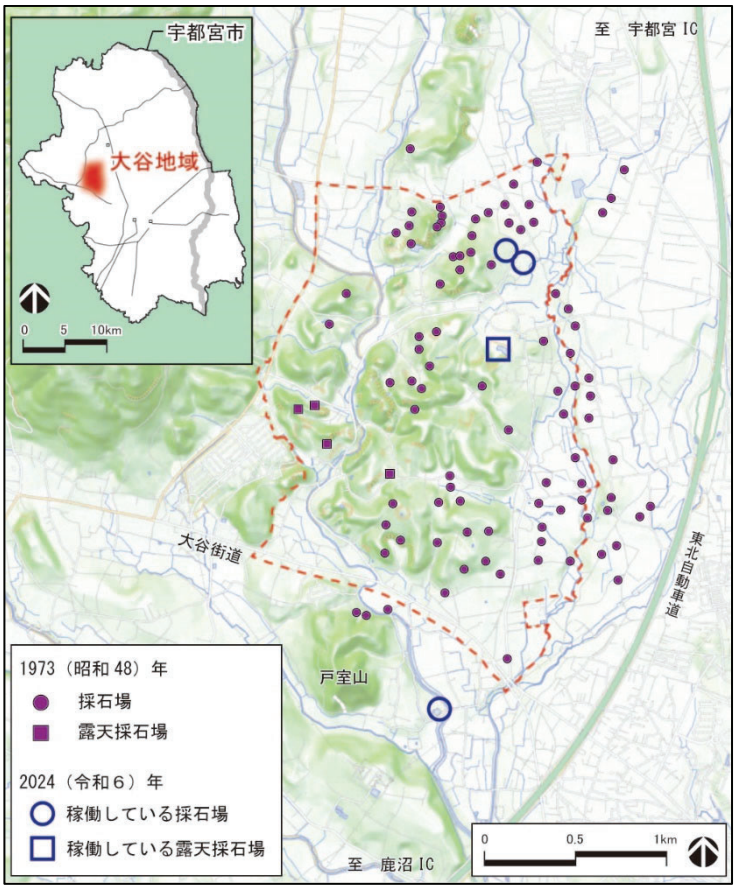
（8）大谷石産業

本市の北西部，大谷町・田下町などを含む大谷地域では，この地域に広く分布している緑色凝灰岩である大谷石の採石業が営まれており，現在も続いている。

大谷石は比較的柔らかな石質をもち，加工が容易であったことから，豊富な資材として様々な用途に用いられた。大谷石の利用は縄文時代まで遡り，大谷寺付近の洞穴が住居や墓地として利用された痕跡が残っている。古墳時代には石棺や石室の材料として利用され，平安時代には弘法大師が洞穴の壁面に千手観音等の磨崖仏を彫り，大谷寺を開いたとされる。

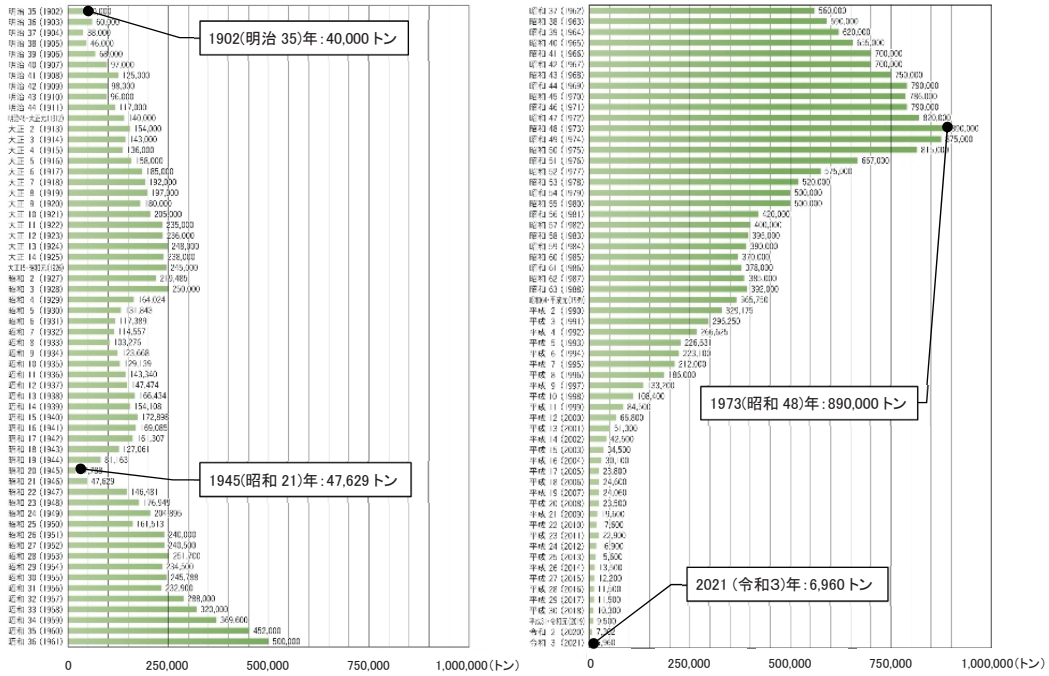
江戸時代にはすでに産地が形成され，明治・大正時代から昭和にかけて大谷石の需要が大きく伸び，採石産業は 1965(昭和 40)年代にピークを迎えた。

■1973（昭和 48）年の採石場の分布と 2024（令和６）年の採石場の分布



※ベース図は地理院地図 Vector より作成

■大谷石の出荷量（1902(明治 35)～2021(令和３)年）



【出典】大谷石材協同組合提供資料・『宇都宮市史』

（9）文化財展示施設・文化財保存管理施設

本市には，歴史文化資源の保存管理や展示･公開を行う以下の施設が設置されている。

①行政（市立）の施設

【飛山城史跡公園･とびやま歴史体験館(国指定史跡　飛山城跡)】

1977(昭和 52)年，「飛山城跡」が国指定史跡となった後，2017(平成 29)年に開園した。施設内のとびやま歴史体験館では，遺跡から出土した遺物や模型などの展示のほか，勾玉つくりや，中世の衣装体験等を行うことができる。2009(平成 21)年より，指定管理者として NPO 法人飛山城跡愛護会が管理運営にあたっており，中世の城館跡である飛山城跡の恒久的保存を目的とし，歴史を分かりやすく伝え，市民にとって身近で多様な楽しみ方のできる場として整備されている。

【上河内民俗資料館】

1982(昭和 57)年，「郷土の民具や文化を一つでも多く保存し，伝承すること」を目的に，上河内村時代に上河内郷土伝承館として開館した。2007(平成 19)年の上河内町と本市の合併により，市内の伝統文化や民俗文化財を紹介する施設となり，2016 年(平成 28 年)に上河内地区センター3階に移転し，リニューアルオープンした。

【うつのみや遺跡の広場(国指定史跡　根古谷台遺跡)】

1988(昭和 63)年，「根古谷台遺跡」が国指定史跡となった後，縄文前期の大集落跡である根古谷台遺跡の恒久的保存のため，大型長方形建物や竪穴住居等を復元整備し，1991(平成3)年に史跡公園として開園した。施設内の資料館には，遺跡から出土した土器や石器の展示のほか，墓制の変遷を辿れる模型などを展示している。2006(平成 18)年より，指定管理者として西山文化財愛護会が管理運営にあたっている。

【旧篠原家住宅(国指定重要文化財･市指定有形文化財)】

江戸時代末期より醤油醸造業を営んでいた宇都宮有数の豪商である篠原家の住宅が1995(平成7)年に市の文化財指定を受け，1997(平成9)年に一般公開された。2000(平成12)年には国の重要文化財に指定され，2006(平成 18)年より指定管理者として旧篠原家住宅保存会が管理運営にあたっている。

【宇都宮城址公園】

市の中心部にある宇都宮城の本丸跡を一部復元し，中心市街地の活性化や都市防災などを担う都市公園として整備し，2007(平成 19)年に開館した。施設内には，清明館内展示室，土塁内のものしり館とまちあるき情報館の3か所の展示室があり，宇都宮の原始から近現代に関する通史や宇都宮城の歴史が分かるよう出土遺物や歴史資料を展示している。

【宇都宮美術館】

里山の姿を残す緑豊かな自然環境の中で，憩いの場，芸術文化活動の拠点施設として活用を目的とし，1998(平成 10)年に開館した。国内外のおもに 20 世紀以降の美術･デザイン，本市にゆかりの美術作品を収集･公開。美術･デザインの様々な分野で，美術館で観覧することのできない海外･国内の優れた作品を企画展にて紹介している。

②行政（県立）の施設

【栃木県立文書館】

歴史資料としての文書や記録類を収集・保存し，歴史を後世に伝えるとともに，教育，学術及び文化の発展に寄与することを目的とし，1986（昭和 61）年に開館した。

【栃木県立博物館】

栃木の自然と歴史文化について理解を深めることを目的とし，1982（昭和57）年に開館した。栃木県の身近な自然を紹介する自然系展示や地質時代から現在にいたるまでの栃木県の歴史を紹介した展示室と年数回の企画展やテーマ展を実施している。

【栃木県立美術館】

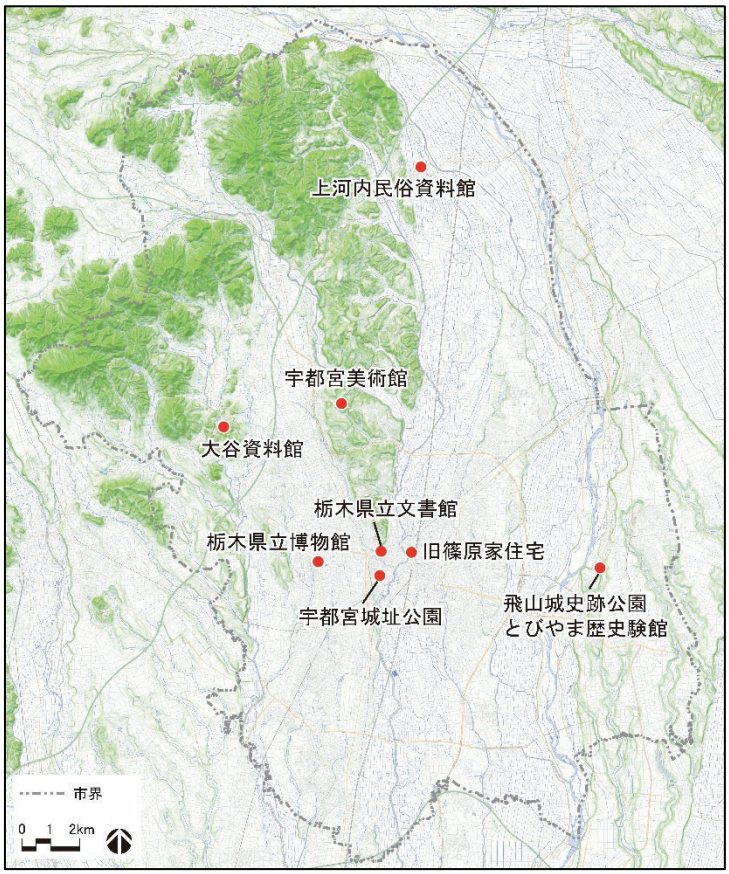
栃木県関係の美術品や美術作家の調査研究や資料収集を目的とし，1981（昭和 56）年に開館した。コレクションは栃木県を中心とする近現代美術やフランス等西欧の近現代美術等を収集・展示し，年4回の企画展やコレクション展を実施している。

③民間の施設

【大谷資料館】

本市大谷町を中心産地として採掘された大谷石についての採掘の歴史を伝えることを目的とし，1979（昭和 54）年に開館した。地下の採石跡を見学することができるほか，展示室には大谷石採石の歴史が分かる道具や記録写真などが展示されている。

■文化財展示施設・文化財保存管理施設位置図



※ベース図は地理院地図 Vector より作成

3．歴史的背景

（1）日本列島の成り立ちと大谷石層の形成

今から約 2,300 万年～1,900 万年前に日本列島が地殻変動により大陸から引き裂かれ，その後日本海が形成され，新生代新第三紀鮮新世の初めのころには不完全ながらも今日の弧状列島の形となる。この間の今からおよそ1,500 万年前に陸地の火山の一つが大噴火し，膨大な量の火砕流が内陸から海岸を超え，はるか沖合まで広がって海底に堆積してできた岩が，緑色凝灰岩の大谷石層である。また，八幡山公園周辺で見られる砂岩･泥岩層は，今から 1,200 万年前のものと考えられ，二枚貝やサメの歯などが発見されている。第四紀更新世の終わりの2万年前頃には日本列島がほぼ現在に近い形となり，約1万 3,000 年～1万 2,000 年前には，最後の氷期が終わり，海面上昇により宗谷海峡が海水面下に没し，徒歩による大陸との行き来ができなくなる。

（2）原始・古代の宇都宮

今から4～3万年前に，大陸から人が移動し，日本列島に人が住み始める。この時期は，非常に寒い気候が続いた氷河時代で，日本と大陸は地続きで，ナウマンゾウやオオツノジカなどの動物を追いかけ人も移動してきたと考えられ，国指定史跡飛山城跡でその時期の獲物を捕らえるための「落とし穴」と思われる遺構が見つかっている。

縄文時代の始まりのころは，大谷寺洞穴遺跡のような洞窟や岩陰を利用して生活する場合と，野沢遺跡のような広い台地の縁辺に竪穴住居を建てて住む場合があった。気候が徐々に温暖化すると，広い土地に集落をつくるようになる。前期（今から 6,000～5,000 年前）には，東北･北陸地方で多く見られる大型の建物跡と同じようなものが，国指定史跡根古谷台遺跡で発見されている。この遺跡の墓穴から出土した首飾りや耳飾り等の装身具は，ネフライトと呼ばれる特殊な石を使っていることから，交易品の可能性が指摘されており，他地域との交流があったことを物語っている。

中期になると，人口がますます増加し，竹下遺跡や御城田遺跡等のような大きな集落が形成されたが，後期から晩期にかけて気候が寒冷化し，次第に集落が小規模化する。この時期に営まれた石川坪遺跡や刈沼遺跡では，土偶や石棒等のまじないに用いたと推定される道具が多く出土している。

草創期の竪穴住居跡（野沢遺跡）

復元された長方形大型建物跡（根古谷台遺跡）

刈沼遺跡出土石剣

弥生時代は，大陸文化の影響を受け，九州北部に稲作や金属器を使う新しい文化が生まれ，西日本一帯に広がりをみせる中，この地域は未だ縄文時代の色彩を色濃く残していた。中期の野沢遺跡では，縄目が付いた弥生土器が出土し，墓は再葬墓と呼ばれる関東から東北地方南部にかけて見られる形態のものが確認されている。後期になると，宇都宮の南部を中心に二軒屋式土器と呼ばれる土器を使用し，小規模な稲作を営む集落跡が見られるようになる。

宇都宮における稲作の本格的な導入は，古墳時代になってからと考えられている。この時代の幕開け，即ち畿内地方の大和王権との交流の始まりは，宇都宮南部にある茂原古墳群の築造が契機となる。この地域では東海・北陸地方等の外来系の土器が出土し，古墳文化の萌芽にそれらの人びとの移動が深く関わっていたと考えられる。そして，この花開いた古墳文化を引き継ぎ発展させたのが，笹塚古墳（県指定）や塚山古墳（県指定）の被葬者たちであったと推定される。また，古墳時代後期になると，宇都宮北部丘陵上に横穴式石室をもつ多数の古墳群が築造され，宇都宮の北部にも古墳文化が浸透していった。

上空から見た笹塚古墳

日本が律令国家となった奈良時代において，国郡里（郷）の中央集権体制が確立し，この地域は河内郡と呼ばれるようになる。その中心となる郡の役所と想定されているのが国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡である。この遺跡に隣接する「東山道」をとおって，人・物・情報が行き交った。この頃になると，郡内に郷と呼ばれる拠点的なムラが形成される。その一つに二荒山神社の南側にあった「鏡ヶ池」の周辺に営まれた「池辺郷」がある。二荒山神社がこの地域の守り神として成立したのもこの頃と考えられ，地域の人々の心の拠り所として今日まで信仰され続けている。また，釜川沿いには，上神主・茂原官衙遺跡や下野薬師寺に供給する瓦を焼く窯業が成立し，その周辺に北の前・前田遺跡のような大きな集落が営まれた。

東山道と推定されている道跡（上野遺跡）

（3）中世の宇都宮

中世都市「宇都宮」の中核となる宇都宮城は，939（天慶2）年の藤原秀郷築城説と 1063（康平6）年の藤原宗円築城説があるが，定かではない。一般的に宇都宮氏は後者の宗円が初代とされ，22代国綱までの約 500 年間この地を治めた名門で，二荒山神社の神官を兼ね，政治と宗教の両方を掌握していた。また，鎌倉幕府の要職を務め，独自の和歌集を作るなど文武に秀でた武将であった。

3代朝綱は，平安時代末期に京武者として活躍し，1189（文治5）年の奥州合戦の際には源頼朝軍に従軍し，阿津賀志山の合戦での勝利に寄与している。

宇都宮朝綱像（『下野國誌』より）

また，5代頼綱は，謀反の嫌疑を受け出家し「蓮生」と号し，上京して法然に帰依し，法然の死後は証空に師事した。歌人としての才能にも優れ，藤原定家と親交を持ち，定家に京都の小倉山にある山荘の襖に貼る色紙和歌を百首選んでもらった。これが後の「百人一首」の基になったと言われている。

さらに，6代泰綱，7代景綱は，鎌倉幕府の評定衆や引付衆を歴任し，8代貞綱は，元軍の襲来に対し日本側の総大将として約6万人の兵を率いて九州に出陣するなど，鎌倉幕府内で宇都宮氏は重要な役割を担っていた。

なお，このような政治の中心である鎌倉や，文芸の最先端である京都，そして金や馬の産地であった奥州との交流を支えていたのが「奥大道」であった。

鎌倉時代の末期，9代公綱が楠木正成と戦った際に，「宇都宮は坂東一の弓矢取りなり」と正成が言ったと『太平記』にえがかれ，宇都宮氏が武勇に優れていたことが全国に知られていたことが分かる。また，南北朝期に，足利尊氏と弟直義との対立において，10 代氏綱が尊氏方となり，助けたことが賞され，上野国と越後国の守護職になっている。室町時代になっても宇都宮氏は武勇に秀でた武将であった。

宇都宮公綱像（『下野國誌』より）

この時代の宇都宮には，東勝寺・興禅寺・粉河寺をはじめ，多くの寺院が立ち並び「香煙のため王地を覆うの感あり」と言われており，宗教色の強いまちであったことが分かる。

戦国時代の宇都宮氏は，隣国の佐竹氏と同盟を結ぶなどし，武田勝頼や小田原の北条氏ら周囲の戦国大名の侵攻を防いでいたが，何度か宇都宮城下が焼かれたことから，一時多気城にその拠点を移し，北条氏の攻撃に対抗した。

多気城跡全景

1590（天正 18）年に豊臣秀吉が小田原の北条氏を倒すと再び宇都宮城に戻り，その後は豊臣治世下の大名となり，1592（天正 20／文禄1）年の文禄の役に参加するが，1597（慶長2）年に秀吉の命により突然改易となり，長きにわたる中世宇都宮氏の歴史の幕を閉じる。

（4）近世城下町として繁栄した宇都宮

江戸時代になると，宇都宮は東北地方の上杉や伊達等の外様大名を抑える上で軍事・交通上の重要地点に位置付けられ，城主は譜代大名から任命された。

その中の1人である本多正純は，1619（元和5）年に15万5,000 石で小山から宇都宮に入封すると，宇都宮城とその城下の整備に取り掛かった。今まで宇都宮城の東側をとおっていた奥州道中を西側に付け替え，伝馬町で日光道中と奥州道中に分けて，大きく町割りもつくりかえ，近世の城下町としての体裁を整えた。現在の宇都宮はこの時の町割りがベースとなっている。その後正純は，突然改易となったことから，後に講談などで「宇都宮釣り天井事件」として取り上げられるようになる。

復元された宇都宮城の土塁と櫓

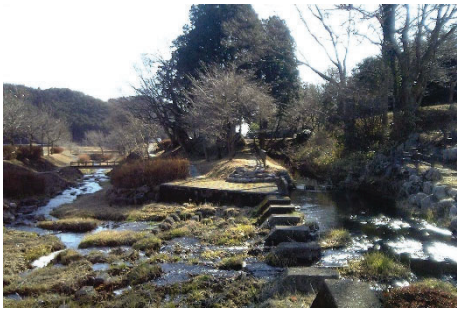
当時の宇都宮は，参勤交代や日光東照宮の造営，将軍家の日光社参が 19 回も行われるなど多くの人々が行き交い，浮世草子作家の井原西鶴が「都の風俗にすこしもかハらず，男女ともしとやかなり，東に稀なる大所，物の自由も爰也」と紹介するなど「小江戸」と呼ばれるほど交通の要衝として繁栄したまちであった。元禄時代の記録によれば，宇都宮城下の人口は約1万人だったようである。

このような人の賑わう城下において行われたお祭りの一つに，1672（寛文 12）年から始まったとされる宇都宮大明神の秋山祭の付祭（明治時代より菊水祭と呼ばれる）がある。『諸国御祭礼番付』によれば，江戸の山王祭や神田祭とともに東国祭礼の最上列，十指の一つに数えられ，多いときは 39 の祭礼町から各種の山車，彩色屋台，芸屋台，練り物，鉾など多彩な出し物が登場する盛大な祭であった。

1710（宝永7）年に戸田忠真が城主となり，一時島原の松平氏と所替えとなるが，再び戸田氏が城主となり江戸時代の終わりまで続く。

この時代には「寛政の三奇人」として知られる蒲生君平や城主でありながら玄人肌の花鳥画を描いた戸田忠翰，狩野派系画家の菊地愛山など学問や芸術文化が花開いた時期でもある。特に蒲生君平の「山陵志」は，幕末の宇都宮藩の家老間瀬和三郎や中老県六石等による山陵修補事業に受け継がれた。

江戸時代の末期には農村部で新田開発の動きが活発化する。1851（嘉永4）年に二宮金次郎の設計・施工により，石那田堰から徳次郎六郷用水が完成し，その後，西原新田村でも吉良八郎の指導のもと用水路の工事が進められ，1859（安政6）年に宝木用水が完成し，宝木台地上でも水田が作れるようになる。また，宇都宮の豪商菊池教中は，鬼怒川沿岸の岡本新田・桑島新田の開発を行い，その功績により宇都宮藩から御家来並・七人扶持に取り立てられている。



整備された宝木用水取水口

また，農村部では，二階建彫刻屋台形式の天棚を設置し，五穀豊穣，風雨順調を願った天祭や悪疫退散，家内安全などを願った一人立ち三匹獅子舞が各集落で行われた。また，日光街道沿いの村では，石那田八坂神社の祭礼付祭，徳次郎智賀都神社の付祭で彫刻屋台が繰り出されるなど賑わいを見せた。

上横倉の獅子舞

1868（慶応4/明治元）年の新政府軍と旧幕府軍とによる戊辰戦争の際には，宇都宮藩は新政府軍に属し，旧幕府軍の攻撃により城を退却する際に城下に火を放ち，48町のほとんどが焼失した。

（5）町から市へ 宇都宮市の誕生

近代に入り，国が進める殖産興業の政策もあり，江戸の豪商川村迂叟が 1869（明治2）年に石井村大嶋に器械製糸場「大嶋商舎」を創設した。官営の富岡製糸場ができる一年前である。

1871（明治4）年の廃藩置県により宇都宮県ができたが，1873（明治6）年には栃木県と合併になり，一時宇都宮から県庁が消え，県政の中心が栃木町に移る。

1882(明治 15)年に県庁の宇都宮移転問題が公的な席上で論ぜられるようになり，川村河内郡長を中心に県庁の移転運動が展開された。県令三島通庸は栃木町から宇都宮町への県庁移転を決定し，県庁の新築工事が行われ 1884(明治 17)年に新庁舎が開庁となる。これにあわせて，大通りの貫通工事や諸官庁，学校などが整備され，1885(明治 18)年には東北本線が大宮－宇都宮間で開通し，1886(明治 19)年には市制施行により「宇都宮市」が誕生し，名実ともに栃木県の政治･文化･経済の中心地となる。

1907(明治 40)年に陸軍第 14 師団司令部が置かれたことにより，軍都として国防上重要な役割を担うことになる。師団長官舎前の軍道は多数の桜が植えられ，桜の名所として有名だった通りで，現在その名残が「桜通り」という名前で残っている。また，満州を転戦し帰還した将兵が餃子の製法を持ち帰り，それが一般の食卓にも広がり，現在の「餃子の街宇都宮」に繋がっている。

大正時代になると二荒山神社南の「バンバ」広場に常設の屋台店「仲見世」が建ち，バンバと呼ばれる繁華街となり，その後映画館や芝居小屋が立ち並ぶなど，浅草六区にひけをとらぬ賑わいを見せていた。また，創作版画で有名な川上澄生が宇都宮で教鞭を執り版画を精力的に製作していたのもこの時期であった。

紙本淡彩県庁新設祝賀之図

1927(昭和2)年の都市計画法の指定を契機に，街路網と住宅･商業･工業地域，公園や風致地区が確定され，1931(昭和6)年に東武宇都宮線が開通すると，沿線の開発を促し，市南西部の市街化が進む。

1937(昭和 12)年に盧溝橋事件から日中戦争が始まり，その後 1941(昭和 16)年 12 月8日の真珠湾攻撃により太平洋戦争が勃発する。宇都宮にも中島飛行機製作所が設立され，日本製鋼，日化工業など次々と軍需工場が進出した。また，大谷石の採掘跡の地下を利用し飛行機の生産も行われた。

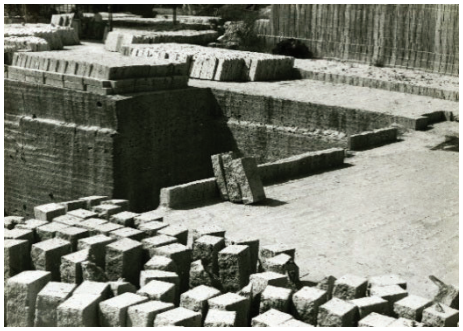
終戦直後の二荒山神社前

1945(昭和 20)年7月 12 日の宇都宮空襲では市街地の大半が焼失したが，戦後一早く戦災復興土地区画整理を進め，全国でもまれにみる復興をとげた。その時の市民の心の支えとなったのが，空襲で焼け野原となった地に焼け残った宇都宮城の三の丸の土塁の上の大いちょうで，現在市の天然記念物として指定されている。

（6）都市の発達と文化振興の芽生え

1953(昭和 28)年に町村合併促進法が公布されると，町村合併の機運が高まり，1954(昭和29)～55(昭和 30)年にかけて隣接1町 10 村が合併し，旧市内の商･工･住宅地を中心に，周辺に広大な農業を中心とする地域を加え，市域の拡大とともに，人口も22 万人余と増加する中，百貨店の進出やオリオン通りの全蓋アーケード整備など「商業都市」としての基盤形成がなされる。

1965(昭和 40)年代になると高度経済成長期が訪れ，1966(昭和 41)年に平出工業団地の造成が完了，1972(昭和 47)年に東北縦貫自動車道が開通，1976(昭和 51)年には内陸最大級とされる清原工業団地の造成完了など「工業都市」としての基盤整備が進む。このころ，耐火性や加工のしやすさに優れた大谷石の出荷量が 70～90 万トンとなり，市内の蔵や塀に使われたほか，東京や横浜などの首都圏にも多く出荷され，都市の基盤整備の一翼を担った。尚，首相官邸や 1964(昭和 39)年の東京オリンピックの会場となった国立競技場の土台にも大谷石が使われた。


大谷石の採石場

このように商工業が発展する一方で，開発に対し文化財を保護する動きも起こった。飛山城跡周辺での宅地開発に対し，地域の人々が中心となり城跡の保存の動きが高まり，1977(昭和 52)年に飛山城跡が国指定史跡となった。また，第2霊園建設に伴う発掘調査により見つかった縄文時代の大規模集落である根古谷台遺跡は，その規模の大きさから全国的な注目を集めた。そして，1988(昭和 63)年に国指定史跡となり，時の市長は「墓園は他に求めることができるが，遺跡は他に求めることができない」とし，貴重な遺跡の保存を決断した。

また生活の基盤整備が進むにつれ，「心の豊かさ」や「生活の質の向上」が求められるようになり，それに併せて「文化芸術の振興」が求められるようになった。1978(昭和 53)年には文化活動の拠点となる宇都宮市文化会館が開館し，翌年に本市の芸術・文化活動に携わる団体により宇都宮市文化協会が発足した。さらに，1980(昭和 55)年に第1回宇都宮市民芸術祭が開催されるなど，市民と行政が連携して文化芸術を振興する体制が整ってきた。

さらに平成に入ってからは，宇都宮大学，宇都宮短期大学音楽科に加え，作新学院大学，帝京大学，宇都宮文星短期大学・文星芸術大学，宇都宮共和大学が相次いで開学するとともに，新たな芸術分野としてのメディア芸術の振興により，放送・映像に係る専門学校が設置される等文化芸術色の強い「文教都市」としての充実が図られてきた。産学官の整備が進むにつれ，1996(平成8)年には中核市となった。

この年は市制施行 100 周年に当たり，様々な記念事業が行われる中，平成記念子どもの森公園の開園や宇都宮美術館が開館し，新たな教育・文化・芸術の拠点も整備された。また周年事業の一環として百人一首ゆかりのまちとして全国最大規模の百人一首市民大会が毎年開催されてきた。そのほかにも，本市出身の世界的ジャズプレーヤー渡辺貞夫氏の顕彰などを目的とした「ジャズのまち宇都宮」の取組や全国稀有の「うつのみや妖精ミュージアム」を開設するなど，多彩な文化振興事業を展開してきた。

宇都宮美術館

ジャズ

妖精ミュージアム

（7）新たな文化交流都市を目指して

2007（平成 19）年の本市，河内町，上河内町の1市2町の合併により人口が 50 万人を超える北関東最大の都市となり，2011（平成 23）年には群馬-栃木-茨城の北関東三県を結ぶ北関東自動車道が全線開通した。また，本市と芳賀町により，新たな公共交通網が計画されている。今後も様々な都市との交流を通し，市民憲章に掲げる「文化の薫るまち」を推進していく。

2018（平成 30）年5月には，「地下迷宮の秘密を探る旅　大谷石文化が息づくまち宇都宮」が日本遺産に認定され，多くの人々を魅了している。2022（令和4）年11月には，JR 宇都宮駅東口地区にコンベンション施設「ライトキューブ宇都宮」がオープンし，学術会議や展示会，音楽コンサートなどが行われ，多くの人々の交流の場となっている。また，2023（令和5）年8月には，路面電車としては 75 年ぶり，全線新設の LRT としては国内初となる「ライトライン（芳賀・宇都宮 LRT）」が開業した。公共交通の利便性の向上はもとより，交流の促進による地域の活性化など，本地域の発展に大きく寄与するものとして，市内外から注目を集めている。

ライトキューブ宇都宮

ライトライン（芳賀・宇都宮 LRT）